



13  
2945  
25



門へ13  
2945  
25

曲亭主人人著

全部五卷  
三拾冊

椿説弓張月殘編

葛句節北齋畫

羣鳳堂  
耕玉堂梓

青城高聳白雲叢。渺渺江天望不窮。山色朦

朧環檻外。水光瀲灩映牕中。遙憐大義千秋

隔。更歎雄圖一旦空。回首不堪頻借問。野花

寂寞對春風。城頭一望尚巍然。往事唏噓

獨可憐。寒徑空飛霜後鳥。荒臺幽鎖雨中烟。

曾扶社稷聲名重。更濟乾坤節義堅。若問先

朝亡鼎恨。從來但有失忠賢。

揚文鳳自云城主毛國鼎者先朝之忠義也。且為諛者被害國鼎亡而不久先朝亦失其

右琉球揚文鳳中城覽古詩

著作堂主人錄

春心月長月合貴



天  
天

天  
天



佳奇呂麻  
鳴長林太夫



讃岐院の神使  
大郎坊 為仲

天  
天  
天

天  
天  
天



中山王子

悲歎雖屬人  
生事  
窮達難爭造  
化權

釋

可公



賤婦十歲

為子芳墳到碧岑  
西風颯々柳森森  
可憐夫婦千秋恨  
長使遊人泪滿襟  
琉球楊經齋吊夫  
墓詩

圖

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月殘編下帙目錄

第五十七回

松山磯嶋長救夫妻

巴麻嶋為朝訪神仙

第五十八回

射飛鳥神童談兵

姑巴嶋父子再會

第五十九回

造舟紀平治出孤島

負箭舜天九趣山北

第六十回

秉燭山妻留客

借劍樵夫供婦

第六十一回

穿壁三兇刺源按司

泣淚為朝瘞卒都婆

第六十二回

城山中毛鶴張寬家

天孫廟阿公贖首級

第六十三回

救弟認祖落月弓

推因談果解手刀

第六十四回

刎情人紀平治懲隱隱

剪頭髮舜天丸全孝順

第六十五回

斬賊將林太夫贈兵糧

發靈箭舜天丸射矇雲

第六十六回

龍宮城三賢述志

夫婦塚兩兒誕生

第六十七回

憐苞苴王女示寂

聽童謠為朝決別

第六十八回

中山府舜天即位

祭神奏樂大團圓

員外一條附錄

為朝神社并南嶋地名辨畧

統計一十二回殘篇下帙五冊の目錄終

全部五編二十八卷六十有八回條目盡于此矣

前編六卷十五回

後編六卷十五回

續編六卷十五回

拾遺五卷十一回

殘編五卷十二回

每編目次各出於簡端

是書文化乙丑年春月初發硯同庚午夏日全結局

殘編引用舊說崖略

壽星老即歌曲南嶋志云其曲則有王者國百

花園為人臣為人子揚香壽星老上蓬萊等

紙糊福祿壽ハカリヌキノ中山傳信録ニ云天妃宮前沼池

内作假山作白鶴池上芥大松一株立地中上亦作

一白鶴如飛鳴相向狀四圍以紙皮作假山羅草花

數十種圍之中作一老人二鹿如山呼祝壽狀此那

霸人所設

板舞中山傳信録六卷云女子於歲初有板舞戲

横巨板於木椿上兩頭下空二三尺許二女對立板

上一起一落就勢躍起五六尺許不傾跌欹側也

多福國コク子益久人ヒト 卽琉球。又作多尼嶋掖玖人見于日本紀。續日本紀。日本後紀。文德實錄。三代實錄等。貴賀井爲キカ井ガ 卽琉球。又作奇界見于東鑑。

神社ヤニ 南嶋志云。宗社之神者。伊勢大神祠自尚

金福始。八幡大神自尚泰始。波上之社。洋之社。尸

棄那之社。普天間之社。末吉之社。並皆奉祀。熊野

大神也。其始不詳云。菅神祠自久米嶋人林氏始。又

有入妃天巽等祠。又浮圖法。唯有禪與密之三教耳。

此餘古實若有管見。則引用。以爲闕典。今不遑校

舉臨編自見

庚午仲春

曲亭陳人解再識

鎮西八郎 椿説弓張月殘編卷之一

昭和九年七月九日 晴末

東都

曲亭主人編次

第五十七回

松山磯嶋長夫妻を救ふ  
巴麻島に為朝神仙を訪ふ

為朝王女ハ具志頭なる。松山の磯再尋て身ハいつくさく餓飢れ。進退九て立在る。折くら。蝶雲ク兵ホ駈出。て落人を搦捕。と。鳴ふ声の耳邊。子々ゆれ。ふ公の猛。と。い。くも。力衰。へ勢竭。て脱。果へうも。あひ。ひ。の。さ。り。し。に。誰。と。い。ふ。あ。く。に。水。際。に。数。亦。た。蓋。の。う。つ。より。了。忽然。と。一。艘。の。独。木。船。を。漕。よ。して。為。朝。夫。婦。を。ま。し。招。れ。と。く。松。も。あ。き。れ。よ。と。い。ふ。敵。う。身。方。う。あ。り。ま。り。秘。と。事。多。心。な。る。事。同。定。不。及。と。為。朝。ハ。王。女。を。扶。引。蹙。る。足。を。踏。運。じ。て。船。不。閃。了。と。

乗り入り紅入懸て漕出さふ。その疾と礫の氷が走るがごとく。此地は  
 澳中へ一里むろり漕ひくじけり。為朝も王女も。どひもけりぬ。  
 彼船人再ら対ひ。かれ危窮の時小慮て。ゆくりおくも故事。  
 過世の契めおふこそ抑何困い。うらねへそ名告あしめ入と宣へ。  
 紅人の怖しく。楫をさめて舷を踏踏。別道ちゆりてより。さやとせ  
 になりてゆへ。面忘れ。うらなをさし。これを佳奇呂麻の嶋長。  
 林太夫といふ。りめなる。按司は夫婦の。あめこそりにて困り。  
 多あり。神の告も。うらりて快船。みらち乗。おん迎ふ。ありの。  
 そん長物。漕なれば。後おこそ。さうさ。えん。い。氣。さ。の。い。く。餓。め。や。と  
 え。と。と。ま。う。の。お。ま。ぶ。齎。したる。お。を。進。し。ゆ。ん。と。信。と。も。て。船。底  
 より。飯。櫃。焼。魚。なん。と。を。とり。出。し。赤。紅。酒。一。瓢。を。り。て。と。と。進。

とれハ夫婦と海月の骨にぬらして嶋人ホク生年ととれ  
 海蘊飯も百珠の美味。い。や。は。し。只。一。瓢。の。村。酒。も。甘。露。の。と。く。さ。ひ  
 なまふるべし。為朝かき。て。盃。を。あ。げ。さ。て。王。女。小。宣。あ。や。う。と。れ。眞  
 袋。お。て。猛。火。お。畏。れ。咽。喉。渴。き。て。堪。が。と。さ。お。駈。馬。の。鮮。血。を。吸。ひ  
 む。れ。凡。馬。の。肉。を。食。ひ。ゆ。め。の。と。や。く。酒。を。飲。さ。れ。ば。全。身。悪。瘡。を  
 獲。し。久。し。う。ぶ。び。て。死。と。り。り。と。れ。馬。肉。を。食。ひ。ざ。れ。ば。その。血。を  
 又。酒。を。喫。て。馬。毒。と。鮮。と。の。酒。食。ハ。價。千。金。眞。女。岷。山。の。片  
 玉。なり。こ。の。み。る。長。が。誠。忠。の。い。ま。所。高。る。べ。う。と。宣。へ。と。王。女。を  
 いう。時。長。が。厚。れ。志。を。賞。嘆。し。七。年。已。前。佳。奇。呂。麻。お。あ。じ。し。世  
 を。潜。び。つ。長。が。信。ふ。お。の。命。を。懸。つ。れ。ば。その。面。影。を。亡。は。



へうのわらわも。身へ疲れたり事多めて君もつらつものも好しく。その  
 人なりとのあつさりた情薄しと恨なせとと真実中りお賄話のへ  
 林太夫の忙しく船小政にさし著之十六嶋おやる中に佳奇居麻の  
 都へ遠く人影稀なる荒塚をたふ再びととび君御夫婦の先途を  
 救ひしもの飲しさい嶋夫が沈むる言語せしむに。さて一昨の  
 かりし身の長一丈あまりはして面と東のこくあつ中りに鼻のその  
 と。この櫓杭を。こつも續々んやうあて修験者めれたる旅客長か  
 門おきせりやう聖有聖のころ。為朝王女りうもに驟雲が賊兵母  
 困られ具志頭の東なる。松山の後お到るに。汝を命く船を出し彼処に  
 赴きてこれを救へといそびしう。いと怪しかりたれハ吾儕おそれく。  
 以乃ハ原何ホの人あ何國より来多ひしれ。くらあつんもあれね

形容なり。と回答をこれお彼修験者息以て志りあつりありこれハ  
 是大日本人皇七十五代の天子。崇徳院のおん使申して濱岐國  
 象頭山より来つるものなり。り疑めて事違くせハ後悔するとも  
 及びさせん。とやういれ縁と催促といふ怪しれこといふさうも  
 あつ縁と推かくして同ら。あつりさんとあつひて仰さうおほてこそ  
 めハ八郎按司の縁由と告する。為かれハ名告志したる人。いふ  
 修験者その回答をせて。濱子鳥跡を都におかよども。身ハ松山か  
 喜とのまごなり。とととび吟じて。かた消とこく失ふなり。この平事ハ  
 あつととくハ嶋人お告あつととるに違ひ。只妻子にのま此ハ  
 のりありととえあつ。俄頃お酒食を准依。糧米用水が積入て  
 船出してふし。具志頭まてハ海上百里おめり。かゝる小松を

美岐院の  
神使  
佳奇呂麻  
天降々

春兌弓長月合貴蕭下失卷之二



本言... 卷之二

ナ

る。聖の間小到らえ。こゝろとわくもひまら。蓬帆のびて走らるる。殊さうかに追風のよし。船のゆくこと平日にとがれて。まのふの黄昏。松山の破へ。若くされとれ。る。何夢のさかし。と。さて。按司や在る。王女や在る。と。項を長中。みして。岸のうこと。えつれども。水降。ま。在。入。と。あ。ら。は。え。は。つ。り。れ。こ。と。か。ま。り。な。ら。れ。ぬ。船。を。蘆。の。中。に。築。め。た。と。め。里。小。越。ま。て。大。里。の。内。体。外。り。か。ら。ま。く。に。長。川。大。里。山。の。敗。軍。に。按。司。も。王。女。も。解。れ。ま。ひ。ぬ。と。し。の。あ。り。げ。も。嶋。袋。の。か。こ。兵。火。幾。り。て。天。と。ま。ま。じ。く。煙。の。中。に。船。の。飛。ぶ。ま。人。遠。く。え。え。る。は。ま。し。く。も。悲。し。く。て。只。忙。然。と。ま。在。ら。る。所。詮。神。の。教。ふ。ま。り。し。て。船。あ。り。た。ち。も。れ。ぬ。ま。じ。と。名。ひ。え。し。て。忙。し。く。舊。の。水。邊。ま。ま。ゆ。り。に。け。こ。と。心。し。ま。く。中。ま。り。り。目。睡。も。せ。て。あ。る。夜。の。岸。の。か。こ。の。ま。ら。ら。ら。瞻。望。て

ゆひ。お。件。の。異。人。が。教。お。と。が。つ。て。君。は。夫。婦。が。岸。ま。ま。在。追。蒐。の。敵。と。え。わ。り。り。ま。あ。は。は。な。り。け。し。と。え。ち。ま。り。小。舟。に。松。山。に。ま。る。と。あ。く。と。ま。え。ま。ふ。雲。違。は。ば。ま。づ。彼。和。歌。を。は。吟。と。船。漕。は。し。て。ゆ。と。一。五。十。と。り。の。か。れ。が。為。朝。こ。れ。と。ま。も。の。と。そ。ん。疑。ふ。べ。く。も。の。ら。ね。瀨。波。院。の。神。灵。の。五。言。を。救。は。せ。ま。ひ。し。彼。瀨。波。院。の。二十一字。に。新。院。瀨。波。院。の。松。山。ま。在。せ。し。と。れ。ま。つ。ら。五。部。の。大。衆。經。の。書。写。し。て。都。へ。は。つ。り。し。ま。ま。と。て。詠。い。ま。り。れ。御。製。あり。ま。ら。れ。小。納。言。入。道。信。西。が。阻。ま。ら。る。御。返。よ。ら。て。朝。廷。め。ま。り。び。食。膳。あり。て。彼。經。卷。と。そ。が。ま。ま。に。情。な。く。も。返。され。し。り。の。院。の。御。怨。之。日。未。あ。い。や。ま。して。天。小。新。下。地。は。禱。り。魔。界。入。て。帝。天。と。じ。え。れ。強。顔。に。奴。亦。小。舟。あり。ひ。あ。く。せ。ん。と。振。る。ひ。と。名。と。ら。ら。似。し。れ。松。山。ま。為。朝。夫。婦。が。呻。吟。を。豫。も。ま。じ

めされ。佳奇呂麻人小救せり。山君恩いとも思ひ。身を投中て数回  
東のめを拜し。多入の王女も感涙禁めぬ。と良人の後方。額著  
め入の林太夫も。今更ふ事著明なる。こころして。共々感嘆あがり。ま  
當下為朝と。ややくに頭を擡去。幸利勇と。誅したれ。と見え。より  
嶋依。めて。驟雲に火攻せられ。馬の腹中に入。猛火と避。く。く。亦  
王女も大里山の敗軍に。士卒駁撃し。幸しく。田と。殺脱嶋依。あ。く。  
夫婦ひと。あ。あ。り。ゆる。は。し。と。物。さ。り。多入の林太夫と。や。く。毎。ふ。或。の  
驚れ。或。と。ち。歎。き。或。の。泣。ひ。て。ま。は。神。の。擁。護。よ。う。い。せ。ま。あ。り  
と。て。未。の。り。た。あ。ひ。を。る。と。行。ふ。船。の。亦。二。三。里。の。ま。り。ぞ。し。て。ま。る。  
為朝。か。ま。り。て。嶋。長。女。對。ひ。く。の。帰。帆。の。追。風。の。あ。は。に。汝。何。処。へ。船  
を。よ。せ。ん。と。あ。か。と。同。多入の林太夫。答。て。さ。ん。の。彼。齋。せ。前。面。中。雲。の

こころ。く。え。え。く。く。の。姑。達。佳。津。奇。奴。巴。麻。嶋。伊。計。嶋。と。い。ふ。四。ツ。の。小。嶋  
めて。巴。麻。嶋。伊。計。嶋。の。住。し。人。も。い。は。れ。と。今。宵。ま。ら。ら。船。と。駁。撃。の  
頃。風。を。ま。ち。て。こ。も。佳。奇。呂。麻。へ。お。ん。供。つ。ら。り。の。ひ。ら。ん。と。い。ふ。為。朝  
あ。う。ぐ。と。と。て。その。淺。小。徑。ひ。ま。ひ。く。巴。麻。嶋。を。投。ず。漕。わ。ら。も。その  
夜。亥。の。比。及。お。件。の。荒。磯。へ。乗。多。り。え。耳。船。の。齋。し。た。糧。も。水。も  
あり。人。住。む。所。な。あ。ら。な。し。の。岸。の。舟。の。音。も。益。は。し。と。て。主。従。之。人。  
揖。を。枕。め。と。長。れ。夜。と。ぐ。ら。め。し。ま。入。の。船。が。浪。の。音。の。と。凄。し。と。  
睡。ん。と。と。あ。い。い。も。寝。れ。れ。ど。や。う。や。く。に。と。と。漏。る。星。の。光。り。も。あ  
く。あ。り。て。あ。ら。彼。の。際。より。の。け。け。く。隨。ふ。嶋。山。の。の。ら。も。笛。の。音。幽。々  
と。え。と。け。て。為。朝。枕。を。敲。て。こ。の。人。な。れ。嶋。の。り。と。い。ふ。お。妙。の。音。れ。き  
と。と。う。ら。び。が。し。あ。れ。い。う。も。と。訝。多入の林太夫も耳を側。し。し。れ。を

うらみきて。あひあつをねるこそめへ。今より六七年のむじ。何処とも  
ありのゆりねど。仙人の在るるとて。とてく。人のいふゆひ。一件の仙  
天よ。晴るれ日。鶴ふ駕り雲よ。はし。二十六の嶋。か。む。り。の。こ  
るんり。この嶋が。彼仙の。さ。う。せ。う。あ。ら。ん。ど。ん。さ。ら。ん。か。ら。  
ふ。く。嶋。ふ。翫。水。遊。山。さ。る。り。の。あ。る。も。そ。え。ゆ。ら。と。い。ふ。か。れ。を  
て。亦。王。女。よ。む。う。ひ。い。う。せ。ひ。も。あ。ら。ん。あ。ら。ん。瀛。洲。蓬。萊。の。仙。人。の。集。會  
と。こ。ろ。こ。と。て。あ。ら。く。あ。ら。も。あ。ら。し。と。り。あ。ら。く。あ。ら。ん。り。と。も。仙  
境。の。む。じ。と。い。ひ。が。じ。り。値。遇。を。ね。る。も。あ。ら。く。あ。ら。ん。り。と。も。仙  
とも。かり。ね。べ。し。い。が。訪。む。や。く。宣。へ。ら。ん。り。も。あ。ら。く。あ。ら。ん。り。俱。し。も。人  
と。て。り。の。も。に。潮。水。ふ。く。漱。き。鮮。血。ふ。塗。れ。る。上。の。衣。を。脱。捨。て。公  
ご。う。り。の。被。櫻。一。つ。嶋。長。林。を。ま。ま。を。独。り。さ。ら。て。船。を。さ。り。し。夫婦。送。り

扶助られて。巖ふ。携。け。は。岸。よ。這。の。げ。り。笛。の。音。の。さ。る。か。く。と。て。あ。ら。こ  
あ。ら。ふ。天。の。既。母。明。を。て。旭。海。より。さ。し。昇。る。隨。ふ。彼。此。を。え。ん。り。の。う。へ。に。  
Sanyū 梅花の散るるぐ。松。柏。の。龍。蛇。の。蟠。り。も。似。て。浮。世。は。遠。き。佳  
境。の。り。彼。流。水。の。瀬。洞。て。桃。源。の。到。り。も。あ。ら。く。あ。ら。ん。り。と。も。仙  
何。と。か。く。心。清。と。體。か。ら。く。して。疲。勞。を。忘。れ。足。の。運。び。も。さ。ら。ん。り。と。も。仙  
嶋。山。の。麓。に。あ。ら。ん。り。さ。る。り。の。音。の。さ。ら。ん。り。と。も。仙  
本。の。樹。蔭。より。ひ。と。りの。童子。横。笛。吹。を。み。た。出。ま。り。の。大。さ  
三。歳。駒。を。号。れ。白。鹿。の。清。水。汲。入。れ。り。と。あ。ら。ん。り。と。も。仙  
桃。の花。を。折。添。て。り。為。朝。も。王。女。も。こ。の。仙。童。と。い。え。る。う。ら。ん。り。と。も。仙  
ひ。う。ひ。さ。ら。ん。り。と。も。仙  
と。ら。ち。笑。と。ま。つ。る。り。の。為。朝。夫。婦。の。あ。ら。ん。り。と。も。仙

せしことあり。翌日大里の按司八郎為朝その妻白縫王女とて詣りて  
 ことありし。汝が為ふに為朝ゆきし。残兵を聚て。霧雲が  
 さんとす。直に姑巴嶋へ推流りて。その人を索よ。こよなれ翼を好  
 色し。あらあれど。今茲に為朝四十三歳。去りも絶命遊年。且當れり。  
 その星の計都也。今空在所異の隅あり。いさご冠が替へる。ん  
 明年の春の季に至て。み次謀る。大吉なり。按司功成り。名遂る  
 の後。それ必ゆきて相見あべし。今より六年と移る。ん。八頭山の邊  
 小侯べし。と見えあせよ。と定む。かくて。師を鶴より乗りて。  
 東海へ赴き。ひさきの亭午こそ。されば。師のこの時  
 師の。按司を。舊の。ぬか。て。姑巴嶋へ。流り。た。ん。と。い。ふ。  
 為朝王女も。いさご。各。年。も。あ。へ。ど。して。あ。れ。て。い。ふ。あ。り。驚。嘆。

去て。あ。り。ても。疑。ま。真。仙。の。教。諭。謹。で。ら。ひ。む。ひ。ね。只。道。顔。次。  
 拜。せ。さ。れ。を。恨。と。さ。る。の。を。抑。お。ん。の。師。に。し。ま。あ。真。仙。の。性。昔。より。  
 跡。を。この。嶋。お。と。え。ま。る。牧。願。の。道。号。を。告。あ。じ。と。す。へ。か。し。と。  
 宵。へ。童子。微笑。て。つ。が。師。の。ゆ。い。忽。卒。母。い。ひ。に。し。これ。を。ん。が。あ。の。つ。ら。  
 曉。る。つ。の。あ。る。し。回。答。つ。瓢。舟。挿。り。な。れ。桃。一。枝。を。抜。り。て。遍。子。  
 せ。し。う。が。為。朝。左。右。の。手。み。受。捧。と。な。は。その。故。を。同。ん。と。な。る。間。お。  
 童子。の。鹿。を。牽。い。そ。が。左。手。なる。茂。林。の中。へ。走。り。入。り。ふ。その。疾。く。  
 追。ふ。べ。う。に。忽。地。え。え。を。な。り。ふ。た。れ。夫。婦。の。面。を。あ。い。し。つ。さ。と。く。  
 奇。異。の。ゆ。い。を。は。して。同。今。童子。が。ら。し。し。桃。の。枝。を。え。ま。あ。香。氣。  
 馥。郁。と。る。花。僅。よ。八。英。の。り。け。で。下。枝。の。花。は。六。英。の。り。衰。凋。之。上。に。花。  
 ニ。つ。い。し。ま。ご。開。く。と。さ。は。ら。ら。か。へ。と。さ。ら。あ。ま。あ。ふ。さ。さ。り。る。短。冊。を。

著しり。さればこそとて。當り受載て。王女もみふこれを見しり。

いふ人の。ためし。も。ひりつ。の。海。こ。こ。ら。の。跡。を。つ。ら。ら。み。

と陰文も印しりける。為朝これを續果て。ら。驚。た。て。王。女。を。見。か。へ。り。

是。ハ。此。保。元。の。こ。ろ。伊。豆。の。大。嶋。あ。て。つ。る。派。せ。し。ま。な。り。こ。の。あ。つ。ま。て。を。

くまぐの。お。つ。り。あり。為。朝。配。所。ふ。あり。し。と。れ。往。昔。曾。祖。義。家。朝。臣。

金の。牌。は。け。て。放。ら。ま。ひ。つ。忽。然。と。飛。ま。て。つ。る。傍。よ。り。こ。の。傍。よ。り。

その。已。前。古。院。の。御。よ。り。て。為。朝。潛。ふ。こ。の。國。へ。當。り。て。王。女。お。玉。と。抱。え。り。

りの。も。あ。ら。に。彼。流。の。鳥。羽。院。あ。て。放。生。行。れ。り。と。夕。え。し。蒼。海。原。城。

凌。れ。ま。て。為。朝。が。滴。唇。を。訪。つ。と。ま。り。あ。ら。の。あ。れ。お。似。り。加。之。

彼。金。の。牌。の。裏。に。

眠柳閑花 遠水亭

仙禽再去 還東溟

逢春便覺 孤霞迴

清影 何時 照我庭

詩句をさへ写しり。ぬしと誰と云ふ秘ども。故ありねづく。あ。ら。の。境。小。
牌。水。を。汰。だ。け。て。文。字。と。袖。へ。ら。し。り。も。又。流。筆。以。終。く。
その。牌。へ。件。の。和。歌。を。書。け。け。に。流。の。再。い。空。中。の。翔。の。あり。雲。と。は。
ま。て。飛。ま。り。ぬ。今。中。至。て。廿。餘。年。疑。ひ。と。え。て。解。ざ。り。し。み。そ。う。は。伊。尊。
に。か。筆。の。迹。を。こ。ん。ご。奇。特。な。れ。是。彼。あ。ひ。あ。ら。を。見。し。り。つ。ら。ら。
比。り。こ。の。嶋。小。往。来。し。た。れ。秋。流。の。異。名。を。仙。客。と。唱。へ。又。仙。人。の。
な。り。と。り。九。鼻。に。鳴。れ。天。外。中。道。遙。し。か。ら。孤。嶋。の。あ。ら。ん。は。
は。し。し。と。い。ふ。べ。う。は。こ。の。短。冊。も。白。中。り。あ。て。ま。ま。が。ら。流。の。君。さ。ら。
似。り。の。あ。れ。へ。し。と。い。ひ。う。け。絲。と。件。の。詩。紙。印。し。れ。袖。を。懸。け。公。の。屋。
あ。ら。て。あ。ら。も。入。れ。も。腰。巾。を。あ。ら。と。な。り。し。ら。数。箇。度。の。窮。し。



春の月日合記



巴麻嶋  
為朝  
仙童  
連

林言石月日合記

一五



お多くと夫ひつれと曩小讀岐院の山陵は通夜せしと夢の中と感  
ふこれ父が紀念の宝剑と燧袋の今にありこれも亦奇といふべし。これ  
多くといひつけて腰はきつれ燧袋を搔撈了。單の袖をぬき多く  
王女は袖小印より詩をこころ。和歌とこころ。かくまで奇しき物語  
を目前しれ意報ふ久後よりいれこころにして。みまこれ曾祖家  
朝臣の賜ゆて且つら丈夫の忠孝と天神地祇氏の神と憐て  
後の栄とあじむる例をさひつぐの海。こころい鳥の跡を今。  
亦この嶋小商とる。さきも冥あり。君も信あり。かく然る奇瑞  
傳ればとく姑巴嶋へ到らせまじと。とくえ多く。マれもさひと  
か。誘多くとて為朝の先よとらて道といそじ。かて海邊よゆり  
あつと林太夫と忙しく船をさしよして。為朝王女と扶乘し。

のやうを同い夫婦と満顔ゆ笑ふ會とて嶋山の麓少く仙童よの  
ふ詩歌のふ。とてちらもかくせえまじと。い。林太夫は只管  
小奇なれと。と唱歎し。遂小籠を解捨て姑巴嶋に投て。漕出  
さんととる。ゆふ。さひは愛と。枝子白くれハの花凋。六ツ又香  
そえて更小新は嘆るぐと。二ツの合の忽然と用れて。香氣に。ゆふ  
しや。はし。これ。亦時ふりて吉祥ふ。つら。と王女と。林太夫  
う壽河にさうせ。為朝の船に乗る。楓の枝をその儘は浪打際へ  
楚と挿。それり。曙雲ふらら勝て中山山南北の二者は掃除こと  
あ。この桃永く栄ふ。と誓ひ。ま。され。この所。その  
夕より。潮の退くと數十町大。この磯となりて。彼桃羊。に。花用枝  
葉を。その長丈餘ふ。及。り。後。ひ。り。て。傳。へ。と。

第五十八回

飛鳥を射て神童兵を談せ  
姑巴鳥小父子再會を

却説佳奇呂麻の嶋長林太夫ハ巴麻鳥の磯を漕出して只管船を  
走らせし水行の業内ハよくあつて西へくるところ楫ヲ並列しりも  
とろく走り帆の南よえゆる三ツの嶋あれや何処と問ふ人ハ東馬齒  
山西馬齒山亦西南にええしる。姑米山と答ふしり。さて中山  
を北よんで度那奇安根呢の崎を渡る隙あぞ瞻望すやれ小  
春の海の静めて神の導く快船ハ瞬らちふ數十里を半ヨウ程ニ  
乗走ししその日の未下刺姑巴嶋の磯へ急に降りこも人なれを  
かれハ磯の衝の友等ハつて。岩らる浪のおのづから。ふりよはしも  
あつて磯小纜を投りて為朝王女と岸母のがしやうや。船ハ駛る

こめて林太夫も後ひもるに。おひの外がれ小嶋かれと山ハ岩りて  
疊れ行く。造化の工致の中まは目馴れ鳥の声きけハ耳あつて  
すれ松の琴ひく瀬と亦らちよる。波の鼓もあつて。腸と渡る  
佳境なり。されハ主後足引の山ハ降りて溪ハ降り。つげ入る桃の  
林の四時をりく。小園くもわく。花のり實のり合あり。香氣珠  
さ。鼻を穿て酔れ行く。醒るがごとし。羽客道士の葎やめると  
まのりちる。けきまふ。経ふ。忽地瀆書の声くちる。されハこそとて  
主従二人息改あて樹の間より。つぐと見え入れ。まハ林の中  
人影して仙翁と仙童と只二人を細目對てゆり。翁ハ眉軒此  
皓く形ハ瘦く枯松のごと。骨逞し。壯士ハ似たり。童子ハ髪  
乱し。羊の鈴ハ定る。糸と。その声ハ十めり。二ツの上と。こ

晴清く眉秀脣朱赤て玲瓏たる。辨舌いとも爽なり。あめく木の  
 糸を綴りあけて肩と腰とを纏ひて海松のてくりにきききき  
 夜のじその隙より見えしれど。乳讓と云真実なり。童子とて  
 上座なる石小尻をうけ。翁の遙か下より。彼童子が読書を故  
 冊きて耳を側をりく。難問をたれしあり。為朝のまほ木かくとく。  
 読書の声を孰聞て。あつく怪しつ。王女の袂を引揺して。密中りお  
 宜あやう。いふゆきまふん。不老長生と根として。真と終り丹火煉る。  
 道書なりん。とどひげらふ。彼処に流ひる兵書く。往昔つが曾祖  
 義家朝臣大江匡房卿より受傳多し。訓閲虎之巻といふ兵学  
 の秘書あり。源家の嫡子相承して。兄義朝これにたむ。あつたふ  
 平治の播乱ふ。我朝これを懐め。東路小赴た尾張る。野間の

内海ゆて長田ゆ誓れもひぬ。と灰おせくのこと。その後、彼書何人の  
 おのりや。あるよしなけれ。この年来。いづくもひとれお。こゝお  
 童子が読書をまけ。彼と是と相似る。それ。あつた。とどろく。耳語  
 めめをあつた。やありけん。童子の一際声をたうし。蓋武羅の漢の樊噲  
 母の衣を得て。草の上にお佩。忠孝の誉四海に溢れといふ。さるも  
 武羅。和合緒あり。忠祿の緒あり。長短みる。口傳。もろく十二  
 幅一尺上り。右の緒を帝釈と名け。中を天上の緒と唱へ。左の  
 上の緒を頭神と名づ。中央は日月の二天子と表し。増長廣目持國  
 多門の四天と混をり。のくと讀む。せん翁傍より。あれを難し。と  
 母衣の樊噲が。母の衣をゆりし。より。とじまる。といふ。説の後。真山の  
 書よええ。とあれら。字おつて。説を設る。と。或は。母衣と

毛衣けふも。多おほくの羽はねをりてこれを織かる今の羽織はねおりといふ名目ななめへ原母衣もとほろより  
 生なまり。これ矢やが避よるまりて城攻しろをのとれ甲よろいの上うへへ被かぐとりて。この説せつ  
 いふはいふんと誌しとハ童子どうしハ茫然まうぜんと笑わらふこと舊説きうせつかゞの如ごとくといふも。  
 樊噲はんたいがこと考くわうる所ところは亦また多おほくの羽はねをりて織かることといふ説せつもあり  
 といふ。夫保侶たへりといふゆゑの義ぎもこれを負おふといふ袋かぶふこと似にたり。二代實録にだいじつろく  
 卷まきの十七清和天皇せいわてんかうの貞觀十二年じんくわんじふにねん三月十六日しがつじふろくにち戊辰つちのぼし後五位下ごごいげ行對馬ゆきたにま  
 嶋守しまもり小野朝臣おのあそみ春風はるかぜ起請おこしこの二箇事ふたごころと進すするその一ひとつ曰いは軍旅ぐんりょ之備のそなへ密ひそ  
 令しむ曾そに在あり。薄うすと雖助すゐすけて以保たへん望請のぞみ調布保保衣たへたへい千領せんりやう以終をひ  
 造つくり以不た真まおとはんと入いれし。かれば保衣たへいハ毛衣けふもといふは且往昔かつむかし  
 より。こゝに假字かりめて書かきしゆれり。母衣ははえと書武羅ぶらと書かきし。みること假字かり  
 たり。保保武羅たへたへぶら五音相通ごおんさうつうして別べつな故ゆゑありといふこと此戎具唐山このえいぐにたうざん

といふその名なをなすこと。これ大日本おほなほんの古実こじつなり。と辨わんん古事こじをかきしること。答こたへして  
 為朝あそこれを竊ちかめて尺釭しちたうハ感嘆かんたん。後生ごせい寔じつにおとること。此こゝに小野おのの  
 神童しんどうありて兵学へいがく既すでに古今ここんに通とじこと。奇あること。妙たくしにあること。頻しばしばにあること。  
 瀨志せしのハ王女おうにょも舌したを挿さけ。夫婦ふうふ面おもてをあしし。彼かれは小この  
 膝ひざをとりて入いりて君きみが發明はつめいとの説せつをいひし。それは偏へんに穿鑿せんさくのこと。  
 敵たけら拉らぐの術じゆつありといふ。水戦すゐせんして水中すゐちゆうに交まひあひし。いふこと。せんげば  
 そのことはいの屏へいの法はう亦また龍王りゆうおうの奇法きはうあり。これは豫よに修しゆすることといふ。  
 こゝに水難すゐなんを脱だつれし。あらはは往時りやうじその名なをなすこと。天智てんちの御宇みよに  
 藤とうの千方せんぽう亦また融院じゆうゐんの御時みよとき。丹波たんぱ千丈せんぢやう崖がきにあり。酒しゆ顔げん類るいのこと。藤とうの  
 のりの瓜うり輒しやくくしること。術じゆついふこと。同どうに童子どうしをとりて魚いさなにありし。あらはは  
 亦また方便へんぱんあり。鑪ろをとりて太刀たちの目めを搦しやく通つうしてこれを佩あひること。羅密らみつ

都婆阿路帝那永莎賀と神呪を唱左へ薙て破つとれん変化と  
 つつとも勢もつとるし。まうつとつとつとも魔縁のりめ。と申し隠るるこあらは  
 打太刀も亦目標あらん。そのとれふこそ真言あれ。戸頭覽吠吠  
 莎賀。と五扁唱とまう。申す申す指左右に相組む。その間よりこれ  
 をつれハ妖精変化も隠れはる。敵り大勢りたれを鶴翼雁行  
 長蛇の陣時宜およめて布設一騎も漏さざこれを知り勇おの下弱  
 卒し或ハ孤雁出群勢或ハ鳥龍翻江勢提槍騎馬勢披身勢  
 等劍槍法勇と奮て堅を破了。鏡を碎き立地お等靡け敵の大將  
 射て落とる前されハかくのごとけんといひは。獲て身成起し傍  
 立られ弓に箭刺てまうくと彎固と折しもあれ。鳴鳥の批子を銜  
 て空中高く翔揚れを申りて。兵と射る。矢壺たうと諸羽は

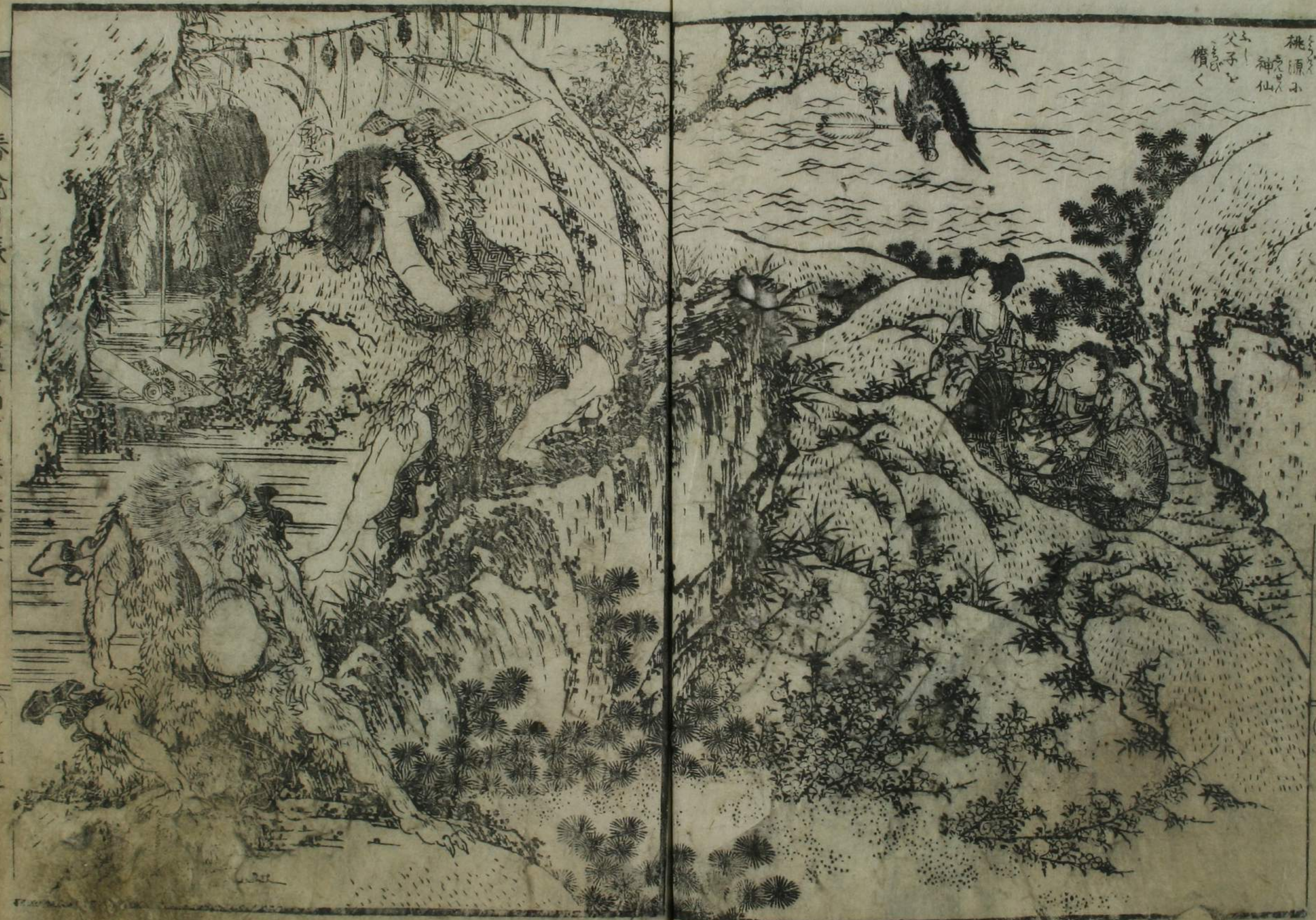
孤雁出群  
 勢水以下  
 圖説兵録  
 子下  
 子下

獲れて鳥を撲地と落しつとる。為朝ハこの形勢不崩と用て声  
 高く射つとつとと誓ふハ童子も翁も樹の蔭よ人あつとをば。と  
 てあれはうち驚きつと信とえて。申す申す船もあつと荒磯よ抄の声  
 をねハいとみじし何國の人。つとくの浦より漂泊し。あかきとね  
 とも人あつとつとつとつと。漢と晋との故事も。申す申すは。つとつとつと  
 あるとつとつとつとつと。主従と人忙し。桃林の中へつとつとつと。為朝  
 礼儀を正くして童子と翁おらら對ひ。これハ琉球山南省大里の  
 按司夫婦のりめなり。近属逆臣利勇と誅し。亦妖賊喋雲を攻めて  
 獲お乗るとつとつとも却這奴が幻術おらら。と士卒盡く討死し。其  
 夫婦ハ辛くして必死を脱れて佳奇呂麻なれ。由縁のりめ。つとつとつと  
 松山の海辺より。独木船おらら乗りて。つとつとつと。巴麻嶋よおらら

長... 卷...

神仙の教よふて更ふらの処へ索ふなり願くは二位の仙君神斐  
 不測の躰をかへ。吾侑を助て暎雲を替亡さし民の塗炭に救し  
 たまへ先王尚寧才浅く愿足くばして倭人を重用し妖僧の蠱惑  
 されて終ふ國家を喪ひて了。されば天孫氏の正統断絶とせし  
 されども。つが妻と尚寧王の嫡女なり彼といひ是といひ我の仗  
 どころ脱且がごとく。波濤をわけて仙境に推し志願を告て神助  
 を祈る偏ふ海容を多へと叮嚀に述べ人の童子へ翁をえかつり。そ  
 の処を琉球國之十六嶋の内なりと汝がいひけれど船もかよつを。  
 浮世小遠れ嶋守ハさるるのりどもあふざりたといと外しくりの  
 ころに翁ハあじしほも回答を為朝をうちまひり亦らち目撃て赤  
 巾なれ眼底に涙を含て別とちりてより。僅七年にさされども

主も亦隸も潮風吹らうすれて汚と垢づれた木の葉を衣に海濱  
 を帯とし山の猿もやしやほして昔の縁もなかりぬれに面忘れ  
 るふかふ人。いふ吾君御曹司ハ町磔の紀平治ふりのを。と名告  
 もあへと童子のりて我弓と捨ててこの賓客を父君とす。年世  
 う舜天丸をて外と携りてつらつらも思ひみるも先づらひ涙の  
 磯の洗ひ松根のあらうれて哀れなり為朝も又王女も。さひつねに  
 喜しこのあすれ袂におく奇の命あり時ありて。ぬらひ相見え  
 つが子の顔へありかは額髪を搔あげて嘆息し。亦紀平治。こ  
 かりつ。窶れも窶れし。八町磔ありの女はして老ふなり。その舜天丸  
 ありつ。叔も大きくなりぬらうね。これの夢ありあがさね後  
 爰なるは見えどもあれいふたふも夥あり。同くきことも夥あり



春の月長月合意書用六夫之...

桃源小  
神  
仙  
父子  
償く

物語月長月合意書用六夫之...

若し死りの因愛の迷ひおこせしうらりの。中りけらうり引きて。  
 物のあつれをまれば又哀飲をききふあつれうら。これをえんれば  
 ともあも王女の頭を搦けり長林太夫も著て只よとのこほ  
 たす人の林をまよ何の故とも。あひうけ糸と長れさの。それあもか  
 びり時兩志をし傘借と公持せり。かへし行ふ細平治の墮れ涙状  
 かへ拂ひ。やう何よりうまうひへき。今茲より七十年む安元二年  
 仲秋十六日の風流れて稚君の御舟碎け高間磯萩本をけり。先と  
 去て後者の悉く波の底ふ入りにされと紀平治の稚君左もあま  
 くは揚ぐ。打かる浪を物ともせと且く泣れぬい。うらうら後も  
 あふ潮お揺あけられ引おろされ力衰へ勢ひ竭れ今うかうとあり  
 折うら大魚の背お助乗せられ其処ともあまら中うやう。この鳥へ

若てゆひき。これの高間磯萩が亡魂大魚も馬で稚君を救ひ。あま  
 うれる。と後おまひあせりあり。かく辛じくこの磯へ流し。流る  
 稚君と。いの経めう緯糸とて。あひくせどもそのうひるし悲し。この  
 又朽をしく。熱お青海原を凌れて。うらう漂ひ。あとも紀平治ひとり  
 存命て何うらせんと蹉跎。はよう外もさどもなけれ。腹くけま。ん  
 とら折うら。とうら。はも神仙の眞助およりて。立地は稚君蘇生。うら  
 け。加之件の真仙この嶋を稚君よ。あまら。し。剣源家相傳の秘書  
 訓。虎之巻を傳受し。この書文。く。編蓬の中。あめ。し。これ。この  
 の。あま。あま。うら。これ。は。朝。由。縁。あ。れ。り。の。そ。汝。紀。平。治。勉。て。る。  
 丸を。あま。二。月。武。術。文。学。を。習。ひ。せ。よ。亦。箇。様。く。の。物。を。り。く。り。  
 造。り。心。放。り。時。を。ま。う。の。後。に。用。れ。あ。る。人。親。子。の。再。會。定。ん。

七四



ぶらうらに。これらわらう他嶋へうほへ。と仰もあそ空中小の  
 まり。今さうかりへ。彼真仙の巴麻嶋お迹をさへ亦大殿を  
 て。あの嶋へまああつり。まうおよそみ比この桃林の中におひて  
 かなれ鶴の羽と金の牌を拾ひほり。この牌の康平年  
 太郎我家朝臣駿の跡に放多し。とれ鳥の足お著あへる。りめ  
 はしの厨子し。これ文字あててやあれ。やぐて真仙の教しうらに。鶴の羽  
 そりて征夫を判鹿の角をりて。濊として第一の矢を伊勢皇太神宮  
 と祝ひ祀て。第二の矢を八幡太神宮と。第三の矢を阿蘇の明神  
 として。主後祈念懈らど。亦この林にお東へ指され。桃の枝と折らりて  
 弓とさし藤蔓を弦とて。或とれへ野駒大鹿をへふ木の皮縮  
 めし。うらをよ細おうけて。稚君お騎射遠射を。日一まうかり。亦

あるとれ。砂お跡ついで。おあつり。し。お聰明睿智傳る。未見の  
 書籍をよく。諸文武の両道と極め。人紀平治る。ど。及お所おあつり  
 その怜悧をえなれば。主後二人よ。えか。お嶋さとなる。り。お憂くらて。  
 いらの程。あつり。大殿お稚君を。遠手さか。じ。よくも。さ。ら。し。養育し。と  
 只一言の仰を。まうら。お望も。も。う。て。立地お命。さ。る。とも。恨を。あ。じ。  
 と。さ。ひ。し。の。ま。きの。あ。つ。り。な。ら。る。四時お花。さ。れ。子。お。結。ぶ。挑。お。や。り。や。く  
 繁と。り。老。か。玉の。緒。長。う。れ。と。忠。義。の。乃。お。惜。し。果。敢。る。と。え。ま。賢  
 れ。は。ら。う。あ。へ。お。ひ。あ。つ。り。て。足。ら。ぬ。言。を。推。り。量。ら。せ。あ。へ。ん。  
 と。一。五。十。を。物。か。れ。儔。罕。なる。忠。臣。の。う。ら。あり。とも。あり。磯。海。の。  
 濱。の。ま。さ。ご。砂。子。と。よ。み。は。く。さ。とも。竭。ぬ。お。定。お。主。後。の。奇。縁。と。と。り。  
 為。朝。ハ。あ。む。く。これ。を。嘆。賞。し。巴。麻。嶋。お。て。獲。ら。り。た。れ。短。冊。之。禮。讃。次

写笛<sup>うりふエ</sup>と<sup>おきな</sup>の袖<sup>そで</sup>をとり出して。その来歴<sup>しんれき</sup>を説<sup>と</sup>く。今<sup>いま</sup>紀平治<sup>きへいぢ</sup>の  
亦<sup>また</sup>よくこれと符合<sup>ふあひ</sup>せり。彼神仙<sup>かみせん</sup>のいづかれ故<sup>ゆゑ</sup>や。かく為朝<sup>ためあそ</sup>と憐<sup>あはれ</sup>  
や。縁故<sup>ゆゑ</sup>ハ曉<sup>あき</sup>くさけれど。そのよし形<sup>かたち</sup>くハあづく<sup>あづ</sup>ふに。それのさかして巴<sup>せ</sup>  
鳴<sup>な</sup>めて仙童<sup>せんどう</sup>うと<sup>い</sup>じと<sup>い</sup>れ。桃<sup>もも</sup>の小枝<sup>せうし</sup>のハッの花<sup>はな</sup>六<sup>む</sup>ツハ凋<sup>しゆ</sup>。二<sup>ふた</sup>ツと合<sup>あ</sup>はれ  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>その花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>ふ。悉<sup>しつ</sup>く<sup>く</sup>香<sup>か</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>新<sup>あたら</sup>ふ<sup>あ</sup>開<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>れ  
な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>嶋<sup>しま</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>じ<sup>じ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>曉<sup>あき</sup>る<sup>る</sup>。一旦<sup>いつたん</sup>凋<sup>しゆ</sup>。六<sup>む</sup>英<sup>えい</sup>の花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>為<sup>な</sup>朝<sup>あそ</sup>夫<sup>あそ</sup>婦<sup>あそ</sup>林<sup>はやし</sup>太<sup>た</sup>夫<sup>あそ</sup>  
松壽<sup>しょうじゆ</sup>鶴<sup>つる</sup>亀<sup>かめ</sup>ホ<sup>ほ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>象<sup>ぞう</sup>の<sup>の</sup>二<sup>ふた</sup>ツ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>花<sup>はな</sup>ハ<sup>ハ</sup>舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>治<sup>ぢ</sup>小<sup>せう</sup>象<sup>ぞう</sup>の<sup>の</sup>只<sup>ただ</sup>惜<sup>あは</sup>  
む<sup>む</sup>べき<sup>べき</sup>の<sup>の</sup>高<sup>たか</sup>間<sup>ま</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>破<sup>や</sup>萩<sup>はぎ</sup>の<sup>の</sup>。か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>鶴<sup>つる</sup>亀<sup>かめ</sup>ホ<sup>ほ</sup>に<sup>に</sup>再<sup>また</sup>會<sup>あ</sup>せん<sup>ん</sup>も  
疑<sup>うたが</sup>ひ<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>て。それ<sup>それ</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>へ<sup>へ</sup>え<sup>え</sup>ハ<sup>ハ</sup>此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>。の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>告<sup>つ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>へ<sup>へ</sup>紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>治<sup>ぢ</sup>  
と<sup>と</sup>舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>面<sup>おもて</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>じて<sup>して</sup>揚<sup>あ</sup>馬<sup>ま</sup>ハ<sup>ハ</sup>奇<sup>き</sup>瑞<sup>ずい</sup>を<sup>を</sup>感<sup>かん</sup>佩<sup>はい</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>亦<sup>また</sup>淫<sup>やん</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>  
去<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>身<sup>み</sup>方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>徒<sup>た</sup>を<sup>を</sup>是<sup>こゝ</sup>彼<sup>こゝ</sup>と<sup>と</sup>數<sup>かず</sup>へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>白<sup>しろ</sup>縫<sup>ぬい</sup>も<sup>も</sup>吾<sup>われ</sup>妹<sup>い</sup>子<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>出<sup>い</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>と。

ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>信<sup>のり</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>同<sup>おな</sup>ハ<sup>ハ</sup>亦<sup>また</sup>舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>わ</sup>も<sup>も</sup>母<sup>はは</sup>君<sup>きみ</sup>何<sup>なに</sup>処<sup>どこ</sup>ハ<sup>ハ</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>琉<sup>りゅう</sup>球<sup>きゅう</sup>王<sup>わう</sup>の<sup>の</sup>  
長<sup>なが</sup>女<sup>むすめ</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て。後<sup>のち</sup>凄<sup>せう</sup>あ<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>宣<sup>のたま</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>母<sup>はは</sup>君<sup>きみ</sup>と<sup>と</sup>世<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>去<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>。飽<sup>あ</sup>きて<sup>て</sup>  
別<sup>わか</sup>れ<sup>れ</sup>契<sup>ちぎ</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>。あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>。同<sup>おな</sup>ハ<sup>ハ</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>胸<sup>むね</sup>若<sup>わか</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>同<sup>おな</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
子<sup>こ</sup>より<sup>より</sup>な<sup>な</sup>ほ<sup>ほ</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup>。回<sup>わ</sup>答<sup>た</sup>う<sup>う</sup>移<sup>うつ</sup>つ<sup>つ</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>申<sup>まを</sup>に<sup>に</sup>。う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>白<sup>しろ</sup>鳥<sup>とり</sup>以<sup>も</sup>て<sup>て</sup>嘆<sup>なげ</sup>息<sup>いき</sup>し<sup>し</sup>。  
往<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>肥<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>を<sup>を</sup>出<sup>い</sup>で<sup>で</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>。ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>その<sup>その</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>風<sup>ふう</sup>難<sup>がた</sup>。脱<sup>だつ</sup>を<sup>を</sup>が<sup>が</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>。  
白<sup>しろ</sup>縫<sup>ぬい</sup>と<sup>と</sup>往<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>古<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>橋<sup>はし</sup>姫<sup>ひめ</sup>と<sup>と</sup>比<sup>ひ</sup>して<sup>して</sup>浪<sup>なみ</sup>を<sup>を</sup>披<sup>ひ</sup>きて<sup>て</sup>水<sup>みづ</sup>屑<sup>くず</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>。ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>  
ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>風<sup>ふう</sup>波<sup>なみ</sup>を<sup>を</sup>止<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>。船<sup>ふね</sup>ハ<sup>ハ</sup>忽<sup>たち</sup>地<sup>ぢ</sup>友<sup>とも</sup>覆<sup>ふく</sup>る<sup>る</sup>。後<sup>のち</sup>壯<sup>まさ</sup>士<sup>し</sup>數<sup>かず</sup>十<sup>じゆ</sup>人<sup>にん</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>魚<sup>いさな</sup>  
腹<sup>はら</sup>ハ<sup>ハ</sup>葬<sup>むす</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>。う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>て<sup>て</sup>為<sup>な</sup>朝<sup>あそ</sup>も<sup>も</sup>。死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>。濱<sup>はま</sup>岐<sup>ぎ</sup>院<sup>いん</sup>  
の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>靈<sup>たま</sup>の<sup>の</sup>擁<sup>よう</sup>護<sup>ご</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>琉<sup>りゅう</sup>球<sup>きゅう</sup>の<sup>の</sup>属<sup>ぞく</sup>嶋<sup>しま</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>佳<sup>よ</sup>奇<sup>き</sup>呂<sup>りよ</sup>麻<sup>ま</sup>。漂<sup>ひら</sup>泊<sup>はく</sup>と<sup>と</sup>彼<sup>か</sup>國<sup>くに</sup>  
の<sup>の</sup>逆<sup>さか</sup>乱<sup>らん</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>に<sup>に</sup>忍<sup>しの</sup>び<sup>び</sup>を<sup>を</sup>小<sup>せう</sup>琉<sup>りゅう</sup>球<sup>きゅう</sup>の<sup>の</sup>嶋<sup>しま</sup>北<sup>きた</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>寧<sup>ねい</sup>王<sup>わう</sup>女<sup>によ</sup>の<sup>の</sup>必<sup>かな</sup>死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>救<sup>すく</sup>ひ<sup>ひ</sup>王<sup>わう</sup>子<sup>し</sup>  
ふ<sup>ふ</sup>渴<sup>かつ</sup>して<sup>して</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>大<sup>おほ</sup>里<sup>り</sup>の<sup>の</sup>按<sup>あ</sup>司<sup>し</sup>ハ<sup>ハ</sup>封<sup>ふう</sup>せ<sup>せ</sup>られ<sup>れ</sup>心<sup>こゝろ</sup>の<sup>の</sup>外<sup>がわ</sup>なる<sup>る</sup>。誓<sup>ちか</sup>縁<sup>えん</sup>も<sup>も</sup>固<sup>かた</sup>辞<sup>じ</sup>

にはあつて王女を娶り。鞍の手を預けられども。人をも住わぬところも  
 琉球國の属をあらはれぬ。つが子へあふあひのけり。とよひに後訪ひ  
 もせむ。訪れもせむ。と時しあひりて。父子再會の情を速く。この源家を  
 護る。神明仏陀の冥助のさる。又犯平治が忠義より。わかれしはな  
 歎き多し。と慰めぬ。舜天丸を。つぐとらうら笑て。泣くとせられが  
 鬘をあらはれ。蔽衣の袖のいとくはしく。別をなせりし。つが子も。つぐ  
 七ツの秋なれば。おん顔定る。みどる縁と。凡生とし。活る物。父あれは。あふ  
 母あり。毎年にと。の嶋山の松より。生育驚く。あも。巢こり。むねの父母は  
 暮あて。鳴く。おいうで。これ父をも。認めらば。母をも。認めらば。ゆめへの海  
 吹流きて。つぐとら。おのふ磯。縁も。友呼ぶ。よ。呼ぶ。りのを。親とも。友とも。  
 家隷。とも。えられ。八町。礫の。頼む所。ハ。神仙の。導れた。ひて。一と。びと。

父あも。母も。おのふ。し。あふ。め。その。い。つ。比。と。果。か。た。澳。と。眺。り。て。立。あ。う。と。  
 朝日の影もつる。國の天なる。おしく。伏せ。神も。仏も。親の。命。長。う。れ  
 恙なく。世に。在。せ。と。祈。つ。た。る。神の。恵。の。あ。り。け。ら。母。あ。ん。絶。く。あ。あ。は。し  
 夕。げ。の。あ。ら。ぬ。枝。び。の。中。に。歎。れ。と。倍。ん。と。つ。つ。流。業。へ。何。処。そ。や。  
 波間を披れて入り。多うと。きげ。今。更。朝。夕。目。別。れ。海。も。な。ら。か。い  
 ぞ。て。樹。の。間。遠。く。伸。あ。り。伸。あ。ら。れ。も。潮。け。あり。雲。小。扶。勢。隔。られ  
 と。か。ね。あ。り。ひ。を。啣。と。り。あ。は。為。朝。も。つ。が。子。の。こ。う。ち。さ。ら。と。あ。ら。せ。え。と。  
 推量。や。よ。舜。天。丸。悲。歎。と。い。と。理。な。れ。と。母。な。し。と。て。歎。く。べ。う。と。と。  
 白雉。え。来。烈。女。な。れ。夫。の。為。子。の。為。小。曩。王。女。の。危。窮。を。救。ひ。て。  
 魂。これ。母。憑。ら。り。み。づ。う。ら。白。雉。王。女。と。稱。と。こ。ん。浮。う。れ。説。し。あ。ら  
 せ。され。ハ。面。影。も。世。異。な。れ。物。の。い。ひ。さ。る。勇。敢。智。慮。と。白。雉。母

家とがふことなし。これをちんちんが母ももえよ。王女のなごてこのいひ  
あつね日未雄くしたふ。さうげおく泣のこ母の情をうんや。いひひなし  
と激され忍びうねつ。轉輾び一声高くよつと泣あれや。実のつが母  
の声かときけが舜天丸と。王女お葬と携りてつね尸を浪舟朽らうあ  
とも魂魄この土おさほりて。由緒あれ人の體を借て。父の後妻と  
なり多人ば。とてもかくてもつが母なり。まごや只一言惜こらまひく  
舜天丸も。つが子ともあれゆらぬ。この嶋山を数なうと。おぢうくと  
暗小遠き海より泣き産の思。まご一ナ日の孝もけくさん。大嶋。在  
とときく。兄君のつ尾張がれ。姊君のつ下野がれ。朝稚君のつが身  
まご西も東も。あつがうじとれ。飯初。面あした。まごばんもあや  
まご。兄お野あつ。形かまき世のたごまごひ。あつにあらまね

舜天丸が。つ泣を哀れと。齒さは母のと名告。しむひ。ねと啣くを  
更ふ哽咽。袂をあむく。引揺と。その手か。中く抱たは。おんちが  
恨ハ理アなれど。りじりめより。母と名告。ば。面影。認ける。紀平治が。  
実とせとて。疑ひの。じりもな。つと。ありあうら。只涙の。まごあり  
落て。いふへた。つもの。いんさ。りた。れ。とも。寧王女。と。その。は。おんち。  
父の。糸。あつ。れ。泣。を。りて。玉。お。撫。う。あ。由。縁。ゆ。あ。れ。魂。が。憑。心。と。を  
あつ。や。あ。つ。種。が。あ。つ。び。らの。お。お。願。と。て。良。人。お。存。眉。付。り。り。  
親子の。原。是。一。世。の。契。り。人。死。て。冥。と。な。れ。の。過。去。と。未。際。と。あ。る。と。ら  
いと。子。ゆ。ゑ。の。圍。と。生。か。う。え。て。も。迷。ひ。く。あ。つ。あ。つ。と。ら。あ。つ。は  
良。人。お。子。ご。も。野。を。り。せ。と。ま。ご。ま。ご。に。よ。お。く。あ。り。ま。ご。あ。つ。お  
福。な。れ。ハ。大。嶋。あ。つ。自。殺。せ。と。後。お。父。は。る。太。郎。為。頼。と。て。又。お。か

腹のりし舜天丸ふらぐえり。り。廿ふあふ年。幾許かむらりの  
衣袋りやさねと。こ子小等。一。年庚の童。腰の續。あげも公  
ふか。ね。縫ひの長。別。母短夜。ね。あうとこと。多。かり。  
かく。す。て。あ。く。ぐ。れ。物。あり。あ。母。が。歎。た。人。あ。ら。ぬ。荒。破。ひ。と。り。き。を  
冊。く。紀。平。治。が。千。辛。万。苦。に。あり。ひ。比。ま。は。數。な。ら。ば。その。丹。城。の  
か。ひ。あり。て。け。再。旗。檀。と。二。葉。より。芳。く。あ。て。衆。木。再。務。れ。雲。鳳  
と。卵。の中。より。その。声。諸。鳥。に。秀。と。り。人。迹。後。に。れ。鳥。の。生  
育。兵。学。弓。馬。を。遠。祖。頼。我。朝。臣。家。朝。臣。ふ。と。と。く。か。ら。ぬ  
おん。才。が。本。事。この。父。ふ。と。あ。の。子。あり。嘘。雲。と。滅。そ。り。の。舜。天。丸  
な。ら。ず。と。も。誰。そ。や。武。運。の。父。も。母。も。似。え。久。後。さ。ぐ。芭。蕉。布  
の。糸。の。乱。と。う。ち。あ。き。え。落。の。羽。衣。清。潔。く。浮。世。の。民。は。掩。ひ。は。く

龜の齡。大。十。あ。ち。て。あ。い。して。曾。孫。玄。孫。の。ほ。乃。後。や。う。と。采。と。と。  
祝。詞。げ。と。ま。は。を。き。木。の。拭。ひ。あ。ぬ。と。涙。あり。舜。天。丸。の。今。さ。ら。に。  
い。と。あ。け。れ。言。の。あ。あ。あ。濡。れ。う。れ。袖。あ。ら。ぬ。あ。い。と。へ。高。れ。母。の。恩。  
あ。ら。ず。び。物。い。ひ。あ。ら。した。ま。う。あ。飲。び。これ。お。ま。と。こ。と。ひ。涙。を。あ。さ。め。あ。  
か。と。慰。め。あ。へ。紀。平。治。の。小。勝。を。拍。て。感。嘆。し。寔。お。王。女。の。おん。言。舌。  
白。蓮。姫。ふ。異。あ。ら。に。面。教。さ。ん。お。似。と。あ。り。あ。り。へ。七。年。前。の。秋。一。旦。死。  
う。れ。親。子。主。従。ひ。と。ら。ふ。聚。れ。こ。の。鳴。の。冥。土。黄。泉。の。街。な。ら。て。長。生。  
不。老。の。門。なり。と。祝。し。ま。う。せ。林。太。ま。も。千。秋。多。歳。と。稱。り。舜。天。丸。  
と。これ。を。えて。俱。した。ま。う。誰。や。と。同。せ。あ。へ。為。朝。の。う。ち。魚。皮。  
て。鳴。長。と。は。と。り。近。く。招。れ。ま。し。あ。れ。の。佳。奇。呂。麻。の。鳴。長。お。林。太。夫。と  
あ。ら。ず。の。な。り。と。じ。め。為。朝。彼。島。へ。漂。泊。し。て。鳴。人。お。ふ。信。せ。れ。その

後王女も嶋長が家かかれて矇雲が残毒を避しこれより彼矇雲  
といふ所のゆめ此くの癖者なり亦大臣利勇が奸悪松壽夫婦の鬼  
親子が忠孝を後作り手扱うこれへしあつるふ為朝が一昨の敗軍に相  
後ふ士卒もなく夫婦りつる糸あひて通霄道を走り身もいとさう  
餓疲れて松山の磯ふ立在賊兵ぬらひ出ぬる入ぬれども御ま  
術なく進退既し究られ折うら讃波院の神具告させぬふこと  
ありとてこの嶋長が豫てより船を件の磯ふよりてそれを俵とれば  
ふと強ふも窮難を脱れぬのこなりは父子面ありとこれとほ  
り。是併讃波院の神助也して又嶋長が忠義と稱し手入を  
舜天丸ハ紀平治りうとも感激し神助と人の誠をあるかきめし  
福なりとて叮嚀事飲び受けえぬハ林を夫ハおそるく頭を擡て

さていふやう。渡されど小國の藎を荒磯ふ人となりてゆへ  
せれしやうにそ物もあつる縁と樓司王女のおん為め命もをしかる  
とこそあひひなれされはあつるなれおのぐあども。誠とおのづかう誠ふ  
あて各将勇婦手値遇しあり。かれ圓居よ侍ること身ひとりありて  
マが嶋の光をまもてべくいと信ぢちて回答り。さう紀平治を  
枝とらなれ桃の子と六ッ七ッうら落して為朝王女おそめまふし  
林太夫あもこれをとりしつそのとれ為朝ハ石湯うて漱きすが彼桃ハ  
りて之社の神と祀り。あむし心中の祈願念トとなりて舜天丸ふあ  
やう。挑ハ邪鬼を除くりの。そのり神代の巻あもええ亦風俗通あ  
ありとらりて。えづる桃ふ由て福を好はる。これ矇雲と  
滅その前象なり。且この嶋ふ伊勢男山阿蘇の之社の神と祀り

こと究めては惜る。おん身いふごその舊とあふん夫鳥ハ熊野権現  
の使者とされバ神武天皇の官軍山路ふ迷入りしとれ天照自王太神  
八咫鳥をりて官軍と争ひしも入れたるあり。その太神を祀りながら  
たうそや一隻の桃を惜みて鳥矢射て落しとる。いと不足と諭し入る  
舜天丸謹むらけ多りの御定ふさるるゆかり。桃をりて糧とされバ七  
年が間この鳴めて益の殺生しつらば。とる父母のいんたると必ひあり  
侍るなればされバ鳥と射とりといふも。諸羽を繕めて傷けと且これと  
懲とのと。今ハ放らゆと。と回答つ。着るる鳥と引起し。箭と抜るる  
羽とされと。阿と鳴ながらおのが棲山踏違ふ飛くゆ。鳥と衆皆目  
送りて舌を巻き。頭を傾け。百歩の外外柳の葉を穿りて。いふ養由基  
ゆ。これゆのいふと。及ぶと。稱噴されバ乃朝もいひはるるこの純く。

舜天丸微妙とかりみたり。弓箭りて國を治りぬ。かくこそめれと只  
一言父の賞美の身おのり。舜天丸より。月紀年治と。身の幅  
廣くありあつる。かくて親子主従の花を席に圍けして七年以事  
の艱難憂苦琉球乱離の一途をいとあゆみ。かきつひもあふ初を  
なればとやたぐれて。えいふからる。月影も燈燭とそめらに似たり。  
至誠の實お神の如し。一旦零落し入るも。求めどして洪福あり。  
為朝の子孫王とあり。武ねとありしも入るる。あふ。

巻二

椿説弓張月拾遺篇下快巻之一畢

